

いこいの村 波多野シズ枝

題字 とくらの家

2015年（平成27年）6月20日発行

第397号

発行責任者

いこいの村聴覚言語障害センター

所長 岩本 幸子

編集

いこいの村編集委員会

〒629-1242

綾部市十倉名畑町久瀬谷2番地

TEL (0773) 46-0101

FAX (0773) 46-0610

<http://www.kyoto-chogen.or.jp/ikoi>



味噌作り！

みそ

『とくらの家』で



「『とくらの家』でも考えた時に、昔ながらの生活の二つとして、皆さんと味噌を作ってみることにしました。」

「今から味噌を作ります。」

皆さん教えて下さい。」

と声をかけると、

「えー、したことないな」と言われながらも、途中から「昔はな、毎年こうやって作っていたんやで」と思い出話が始まります。

こうして味噌は出来上がりでしたが、食べ頃になるまで半年ほどかかります。

「次は何を作りましょうか、この季節には昔は何を作られていたのですか」と尋ねると、皆さんの顔がとびきりの笑顔になり、昔の楽しい話が次から次へと続きました。

（いこいの村・とくらの家
白子 操）

使えない補聴器

使える補聴器

補聴器店で補聴器を試してみても「テレビの音が聞こえない」「フンフン響いてうるさい」と訴える人は多いのではないのでしょうか。もしかしたら補聴器がうまく合っていないのかもしれません。

大事なのは初回の調整です。長く聞こえにくい生活をしてきた方が、初めて補聴器で音を聞くと「うるさく感じる」方が多いようです。補聴器店はその不快感を解消するため補聴器の出力を抑えようとしてくれます。結果、周囲の雑音は抑えられますが、肝心の人の声も聞こえにくい補聴器が出来上がってしまったのです。補聴器調整を成功させるためには、聞き取りと不快感のバランスを



いかにやるかが重要です。

補聴器調整のためのポイント

- ① ある程度大きな音出力に聞き取りの改善があり、且つ何とかな不快感を我慢できる程度の出力に調整します。
- ② 調整期間と頻度
初期調整は3ヶ月程度。その間は、できれば週1回補聴器の調整を。最初はうるさく感じた音も1週間程度で慣れます。
- ③ 初日から常用
起きてから寝るまで、色々な場所で積極的に補聴器を使ってみましょう。最初はしんどいかもしれませんが、効果を実感するようになります。
- ④ 周囲の励まし
3か月間頻繁に調整に通うのは大変なことです。常に使



い、調整するよう周囲が励ましてあげることが大事です。

難聴になると音が脳に届きにくくなり、難聴の脳に変化していきます。急に慣れない音を聞くと難聴の脳はひどく不快に感じます。そのため、補聴器の調整は、少しずつ音を大きくしながら脳を慣らし、聞こえる脳に近づけていくのです。うるさく感じていた音も常に聞いていると脳が変化して徐々に不快感が消えていくはず。補聴器をつけたり外したりを繰り返している

と、脳は変わっていきません。脳を変えて効果を上げるには常に使うことが一番です。「補聴器は高いばかりで役に立たない」「うるさいだけで言葉が聞き取れない」そんな残念な結果にならないように少し我慢して補聴器を使ってみましょうか。

(舞鶴市聴覚言語障害者支援センター 彼末沙記)



《歴史は「今」につながっている》

今年は、日本で初めてとなる京都盲啞院(現在の京都府立聾学校)の初代院長古河太四郎先生の生誕170年にあたります。5月にNHKでも番組が放映されました。

古河先生は、開学前、水不足に苦しむ農民を救おうとして、はからず文書偽造の罪で投獄され、獄中の窓から、聞こえない子どもがいじめられているのを見て、ろう教育を始めようと決意されます。開学後は、当時ろうあ者が使っていた身振りから指文字や手話を考案し、工夫を凝らした教材を開発されました。

盲啞院は147人の子どもたちでいっぱいになり、補助金削減や貧しい子どもたちもいたことから、古河先生はその経営で大変苦労され、辞職せざるを得なくなります。明治30年に来日していたグラハム・ベル(電話機等の発明者)

は「こんな優れた教育者を不遇にしておくのか」と驚き、そのことが新聞に掲載されます。

古河先生は大阪盲啞院の院長になり、政府に視覚障害児教育の義務化を求めて明治38年に政府に建議書を提出。全国に障害児教育が広がる礎を築かれました。古河先生の教え子の後輩にあたるろうあ者が先頭に立ち、いこの村の建設運動をはじめ、「今」があります。

聴覚障害者福祉から高齢者福祉、地域の障害者福祉づくり、また放課後等デイサービスや若者プロジェクトなど、取組みの裾野は毎年広がっていますが、苦しい人の立場を同じ人間として、共感し、共に仲間つくりを広げること、そこには古河先生と同じ「源流」が流れています。

みんなの手話

《アシサイ》

軽く折り曲げ手のひらが上向きの左手の上で右手指を開いたりすぼめたりしながら回転させる。

《紫》

親指と人差指を立てた右手の人差指を唇に沿って右へ動かす



お米販売終了の お知らせとお礼

多くの皆様にご利用いただきてきましたお米の販売事業を、今年の10月をもって終了することになりました。

栗の木寮のお米販売は、平成19年から開始しました。地域の方々が大切に育てたお米を栗の木寮で精米し、販売しています。

体力のある仲間(利用者)が中心に担当してきましたが、仲間の高齢化などの理由で、精米や運搬が困難となってきました。

しかし、仲間にとって「作業」は互いの存在を認め合い、評価し合える大切な仕事です。高齢になっても「働きたい」という意欲を持ち続けている仲間が大半です。高齢になっても、一人ひとりの体力に合わせて担っていただける作業内容を現在検討しています。

栗の木寮の原点「農業」

栗の木寮が開所以来、大切に継続している作業が「農業」です。地域の畑をお借りして野菜づくりに取り組んできました。

昨年は、初めて万願寺の栽培に取り組み、多くの皆様に購入いただき、新たな栗の木寮の看板野菜となりました。ピーマンは毎年500本を定植しています。作業は農業班だけでなく、栗の木寮の仲間



ひとつひとつ丁寧にピーマンを磨きます！

全員で収穫、磨き、選別と役割分担をし、これまでと同じ数を京都生協様に納品する予定です。

無農薬バラの栽培開始

そして、もうひとつの新たな取り組みが無農薬バラの栽培です。無農薬バラの栽培はこれまでの農作業と比べると体力的な負担は軽減されます。また、たからの里の温室プールを改修して行っているため、雨天でも作業が可能です。

栽培については、京都市伏見区で「おくだばらえん」を営む奥田容彦さんに全面的にサポートしていただいています。

今年の3月末、5月中旬の2回に分けて、130本の苗を定植しました。主には食用のバラですが、観賞用のバラも栽培します。

収穫後は、バラジャムやバラティーとして楽しむことが



仲間みんなでバラを定植しました。

でき、たからの里の石窯パンとのコラボレーションやバラを使った体験などを企画していく予定です。

お米販売を支えて下さった皆様、長い間ありがとうございました。

今後、無農薬のバラ栽培が仲間と皆様との交流のひとつとして、また栗の木寮から皆様にお届けする新たな商品として、広がっていくことを願っています。

(いこいの村・栗の木寮

前川 恵子)

介護のワンポイント

『パンツの新しい方』

まずはその方の状態、体型、生活によってパッドの種類は異なってきます。排尿量にあったパッドを選ぶことが漏れの防止につながります。

そして、パッドを当てる際に紙パンツ、おむつの内側にあるギャザーを立ててギャザー内にパッドを納めるようにします。

片方が幅広いパッドの場合、男性は幅広い方をお腹側に、女性は幅広い方をおしり側に当てます。

夜間、寝返りをうったり横向きになったりすると漏れやすくなります。その場合は、体とパッドの間に隙間が出来ないように体に添わせて当てるようにします。

パッドの選び方等で不明な事があれば、とくろ福祉センターまでお気軽にご相談ください。